

研究計画調書作成時の注意点

現状と課題

1. 審査委員がレビューする専門領域が広がったことにより、より分かりやすさが求められている。
2. どのような分野に申請書を出すかも採択の鍵になる。自分の分野にこだわりすぎない。まずは採択されることを目標とする。他分野に出すときはその領域の採択研究をチェックする。
3. 自分のライバルになりそうな相手は要チェック(<https://kaken.nii.ac.jp/>)。タイトルや内容を素早くチェック。
4. タイトルの付け方も大いに参考になる。

申請書について特に意識していること(2)

5. 先のことは良く分からない……その通り実現するかどうか別として、この研究は実現しそうであるかのように書く。
6. 単発の思い付きの研究ではなく、時系列的に業績が分かるように書く(挑戦的萌芽・開発は多少思い付きでも良いかもしれませんが)。
7. 夢を書く……研究で唯一夢を語れるのが Grant 申請のとき。このときに沢山のことを想像し、創造につなげる。論文を書くときにも想像力は必要だが、むしろ推測やデータに基づいてのこと。情熱も伝わる場合があります。

研究目的・概要①

特に意識した点: たった10行程度ですが……

- ① 実績をしっかりと書く。「何を、どのように」自分の研究を発展させ、「どんな成果」を出したか
(第1段落) → 第2段落で「どんな成果」を出したいかが分かるように。
- ① 因果関係を明確化するよう記述。因果の逆転についても言及(第2段落)。複数年の計画なので。
- ② 1~3年目までの研究成果を、4年目において検証するスタイルも可。また、研究成果が社会に役立つこともアピール(第2段落)
- ③ 「無作為化比較試験」などの最先端の研究手法で検証する点を記述(第2段落の最後)

申請書について特に意識していること(1)

1. とにかく分かりやすく……しつこいほど分かりやすく。論文と違って、同じことを繰り返して「別の言葉」で何度も説明。「すでに述べたように」など審査員の脳裏に焼き付ける。表現は簡潔・明瞭に → 誰が読んでも!
2. 興味を引くように……こんなことができれば楽しい、役に立つ、面白い、重要、等々。できれば読んでいて審査員をなれるほどと思わせること → 社会問題と結び付ける!
3. アイデア……普段からアイデアは書きとめておく。できれば普段から視覚化する(図の作成→申請書に入るように)
4. 実際の申請書では「図」を使うようにすると良い。
→ 極端な話、図を読みつなげただけで分かるように!

採択されにくい申請書の特徴

1. 読み手を意識していない……申請書や論文は自分が読むものではない! 相手が読むもの。空欄が目立つは×。
2. 楽しそうに書けていない……この研究やって何が面白い?と思われてはダメ。また、玄人にしかわからないのも注意。
3. 逆に、やりたいことが多すぎて、何がやりたいかよくわからない……やりたいことは1つ、2つで十分。
4. 目的、計画・方法、全体が一貫していない……被験者数が異なっていたり等の細かいミスは最終チェックが必要。
5. 余白の使い方……無駄に余白が多く、図でも表でも挿入すればより分かりやすくなるものもある。図のサイズも調整。
6. 自身の強みが生かされていない……強みを強調。
7. 皆さま、謙虚ですが……私にしかできない、自分の持ち味をもっとアピール!

学術的背景①

必ず含んでいる項目:

- ① 扱っている研究テーマが広い意味で重要であることを述べる(社会問題)。
- ② これまでの研究の問題点や未解決な点を指摘する。
- ③ 広い意味で研究テーマがどこまで達成できているかを記述する。
- ④ 何が解決されるべきかを指摘する。
*単に「やられていない」では説得力はない(時間的、リソースも実現可能性を考慮)

学術的背景②

意識した点:

- ① 自分の実績を示しながら、現在の到達点(広い意味も含めて)を明確に示す。
- ② これまでの自分の研究の流れと、その他の研究の流れが合流するように書くと新しさが目立つ。
- ③ 研究チームがこの研究を実施するにあたって議論してきたことを記述
- ④ 何が分かれば嬉しいのか?ゴールを設定
- ⑤ 段落は2つ

学術的背景③

文献・論文の挿入:

- ① 自分の実績を示しつつも、他の研究者の論文を引用しながら、研究テーマの補強を行う。
- ② 予備的なデータも価値があるので、それを用いて、研究テーマを補強する(未公表データの場合は明示し、学会発表でも良い)。
- ③ 全体として向かっている方向は正しいことをアピールする。

研究課題の核心をなす学術的「問い」①

意識した点:ここは特に差が出やすい

- ① 何が分かっており、何が分かっていないかを図示する。
- ② 図の説明は目立つように四角く囲う。
- ③ 赤字で特に重要な点を説明。印刷が白黒でも分かるように。
- ④ 「働き方改革」などの社会問題に立ち向かうことを記述。

何故、図を多用するか

審査員の認知が容易になる
(全体が理解しやすい)



(理解しやすいと)

情報を真実だと信じやすい



評価が直観的判断になりやすい
(印象が残りやすい)

研究目的

- ① 研究目的は簡潔かつ分かりやすく
- ② 中目標・最終目標も記述する
- ③ 研究の意義、最新の技術についても述べる
- ④ ここでも図を使う(想定モデルなど)
- ⑤ 研究の将来性についても言及
- ⑥ 研究のチーム構成を図示。書くと具体性がある。

測定技術や測定の意義②

- ① 審査員は何の目的で何のために測定するかは理解していない可能性がある → 説明を加えて対処
- ② 測定する項目同士の関連も説明
- ③ それらの測定の意義を図示
- ④ 新しい測定技術への挑戦も含む
- ⑤ 隙間がないように図の大きさは調整

本研究で何をどのように、どこまで 明らかにしようとするのか③

- ① 箇条書きで簡潔に
- ② 年度ごとに何をするかを記載
- ③ 疫学研究でよくある因果の逆転の可能性も克服することを明記
- ④ 最終年度はこれまでの成果を検証するスタイルにした
- ⑤ 最後に何が分かれば面白いかを記載

本研究の着想に至った経緯①

意識した点:

- ① ここでも図を使う。これまでの成果の流れを一目でわかるようにする。
- ② 何をやってきて、どこに向かっているのか、を明確に記述。
- ③ 2重線なども使用(最も強調したい箇所だから)。
- ④ 準備状況もかなり具体的に記述

これまでの研究活動①

意識した点:

- ① 「これまでの成果の流れ」を一目でわかるように図示した。
- ② これまでの研究成果は「文部科研費」や「厚労科研費」によって得られた成果であることを記載。
- ③ 余白があれば、論文以外(あれば受賞歴等)の成果も記載。以上の成果をさらに発展させることを記載。

学術的独創性・創造性

- ① 多様な専門家が本研究に参加することを明記
- ② 将来性・波及効果があることを強調
- ③ 「独創性・創造性」の言葉は必ず使用。その際、どのように独創性・創造性があるかも記述
- ④ 観察研究(研究)から介入研究(実践)につなげる新しい手法も研究に取り入れることを強調
- ⑤ 将来的な社会的ニーズに答えられる新しいアプローチであることも記述

最後の仕上げ(1)

- ① 今回の申請書の大きな変更点は、図を解説する形式に持ち込んだ→門外漢にも読まれる可能性を意識して
- ② 視覚でアピール
- ③ 見やすさは非常に重要(審査員は目が悪く、沢山読まなければならない)→読み手の立場に立って
- ④ 具体的であること、実現可能であること
- ⑤ 面白さ、重要性、将来性等も強調(別々に)
- ⑥ 不自然な余白がないか

最後の仕上げ(2)

- ⑦ 後味が良くなるように
→審査委員も人間、偏見や先入観もある
- ⑧ 5W(Where, When, Who, What, Why)+H(How)?
→これを最後に確認
- ⑨ 列挙したキーワードを使用したか?
→極端な話、キーワードあるいは図だけ飛ばし読みでもわかるように
- ⑩ 自分の強調したいことがきちんと書けているか?
→これぞ自分のオリジナリティー
- ⑪ 最後に、ストーリーが明確か、読んでいて面白そうかを確認
- ⑫ 今後、コロナにより計画がうまくいかないこともあり得るので、その点も記載すると良いかもしれません。